

V T 法(Verbo-Tonal Method)に対する 学習者の評価

崔 春 福

0. 問題と目的

中国語を母語とする日本語学習者に日本語を教える際、彼らがアクセントを間違えた場合、間違いの箇所は指摘できるが、それを改善するためにどう指導すればいいのかわかりやすくするのは難しい。研究を深めていくうちに、筆者は「言聴聴覚論」とそれを基礎とするV T法(Verbo-Tonal Method)に出会った。V T法は、「言調聴覚論」という言語理論に基づく音声指導法であり、言語を全体的にとらえ、聴覚・視覚・身体運動の連続性において言語活動を把握しようとするものである(グベリナ 1981)。従来の日本語アクセントの指導は、主にカセットテープなどの音声教材を利用し、機械的に聴く訓練であったため、学習者が学習意欲を持っていないという欠点もあった。これに対してV T法は、発音の習得を言語全体構造の枠組みで捉える視点を持っているという点でユニークである。さらに、音調上の特徴まで含めた発音指導を行うので有効な方法であると思われる。しかし、日本語教育におけるV T法の研究は、主に方法論を記述したものが多く、学習者がV T法の授業をどう感じているのか、実際に学習効果があるのかということについての報告は少ない。そこで筆者は、中国語母語話者を対象に、V T法による日本語アクセント指導を行い、その指導効果を検証した。

具体的には、V T法の指導効果を検証する実験として、中国語母語話者を2つのグループに分けて、1つのグループにはV T法に基づき両手でアクセントを視覚化する指導を行い、もう1つのグループにはアクセントを図示する従来の指導法を用いてアクセント指導を行った。2つのグループの指導前後における正解率を比較することにより、V T法の指導効果を比較検証した。その結果、被験者のアクセント指導の効果は両グループとも大きかったが、V T法と従来の指導法間の効果はほぼ同じであり、2つの指導法間に有意な差は見られなかった。(崔2007)

では、なぜV T法による有意な差は見出せなかったのだろうか?可能性としては、①V T法は他の指導法と差異はない、②V T法の教授理念は正しいが、具体的な指導方法に問題があった、③V T法の指導方法と学習者(の一部)とが適合しなかったなどが考えられる。筆者は、音声学習・音声教育と身体運動は密接なつながりがある

と考えており、上の②、③の問題が関係するのではないかと推測した。VT法の指導に対して、個々の学習者はどう感じたのだろうか？そこから今後の改善方法が見えてくるのではないだろうか？

そこで、本研究では、中国語母語話者を対象に実施したアンケート調査に基づき、VT法に対する学習者の評価を検討すること、それによって今後の効果的なアクセント指導方法を模索していくことを目的とする。

以上の背景に基づき、本論文では以下の構成によって論を進める。

第1節では、「VT法」の理論的背景を紹介し、「VT法」を用いた先行研究を分析する。第2節では、中国語と日本語のアクセントを分析し、その相違を明らかにする。第3節では、中国語母語話者を対象に実施したアンケート調査の結果と考察を展開する。最後の第4節では、本論文のまとめと今後の課題を述べる。

1 節. 日本語教育におけるアクセントの指導法

日本語教育で、アクセント指導に「VT法」の「身体リズム運動」を取り入れ、学習者に手や首を動かしながら発音させ、指導方法を工夫することによって効果があったということが先行研究で明らかになっている。(川口 1990)

VT法とは、「言調聴覚論」という言語理論に基づいて考え出された音声指導法であり、聴覚、視覚、触覚、運動感覚などを活用している点が大きな特徴である。身体は音声の伝送体・受容体であり、音声は聴覚・調音器官だけで聞き取り、生成されるのではなく、同時に身体を通して知覚される。身体全体を調音器官・聴覚器官と捉え、マクロ(身体全体)の動きで(ミクロ)の動きを誘導し、正しい聞き取りと生成を促すとされる。(ペタル・グベリナ 1981)

1-1 VT法の理論的基盤

VT法は言調聴覚論(Verbo-Tonal System)をその理論的基盤としている。言調聴覚論では、次の5つの原理に基づき言語習得、言語活動を理解している。

①言語習得では音声の聴き取りが優先する。言調聴覚論では、正しい聴き取りが正しい発音の条件であると考え、文字や媒介言語で調音法を説明するのではなく、学習者の耳を聴き取りに集中させ、自己の発音を正しくフィードバックさせることだ、としている。

②言語は全体構造を成す。言調聴覚論の言語教授とは、文法、音声、形態、意味などを、個別にではなく、言語外要素をも含む一つのまとまりとして捉えることであり、音声も、単なる物理的音声としてではなく、言語というまとまりの中で指導する、としている。

③身体は音声の伝送体・受容体である。音声は、聴覚、調音器官だけで聴き取り、生成されるのではなく、同時に身体(骨、腱、筋肉、皮膚)を通して振動として知覚される。すなわち、音声の聴取、生成は、身体全体と聴覚・調音器官との相互活動で

あると言える。

④人間の脳は、言葉の理解に必要な最適要素に基づき機能する。脳は、完成された母語の言語体系に基づいて正しく機能しているが、話し言葉すべての要素を受容するのではなく、コミュニケーションに必要（最適）な情報だけを選択して、言葉を理解している。

⑤リズム・イントネーションは、音声言語全体を総合する要素である。幼児の喃語には、母語の特徴的プロソディがすでに含まれており、幼児は喃語のプロソディを用いてコミュニケーションを行っている。特にリズム・イントネーションは、人間に本来共通する生理的枠組みに属するものであり、各言語特有の「～語らしさ」を担っている。コミュニケーションにおける感情や意思を伝達するだけでなく、音声全体（換言すれば音声言語全体）を一つにまとめる役割も果たしている。

①～⑤（木村1996）

このように、VT法は音声の重要性を強調し、リズム・イントネーションなどの超分節的な要素も重視する意味で、アクセント指導の理論的基盤として適したものであると考えられる。ただし、言語音声の全体性をどのように言語教育の具体的な指導方法として実現していくかは、教授法における課題となる。

1-2 日本語教育における、VT法の先行研究

日本ではVT法は、1970年代から上智大学聴覚言語障害センターで実践され始めた（クロード・ロベルジュ、木村編著 1990）。しかし、主に言語障害のリハビリのためのものであり、VT法は日本語教育においては、あまり実践されてこなかった。例外として、川口 1984；ロベルジュ・木村 1990；木村 1997があり、その実践例が報告されている。

・川口による研究

川口（1990）では、アクセント指導に「VT法」の「身体リズム運動」を取り入れ、様々な母語の学習者に、手や首を動かしながら発音させた。そして、方法を工夫して変えることによって効果があったケースについて報告し、アクセント練習のための「運動」には、「唯一絶対のものはない」と述べている。大事なことは、教師の自己受容性（発話音の位置・運動・緊張を体感する感覚）を正しく再現でき、学習者にも物理的・心理的に受け入れやすい運動であるということである。あとは学習者の「創造性」に任せべきだと述べている。

・木村による研究

木村（1996 a）は、「VT法」の基本となった言語聴覚論を解説し、日本語の発音指導を紹介している。イントネーション、促音、わらべうたリズムの指導方法が紹介されており、それぞれ代表的なものが取り上げられている。また、この文献にはビデオ（木村1996 b）があり、模擬授業ではあるが、実際の授業風景を見ることができ。ビデオを見れば、具体的にどのような手の動きをするのかを見ることができ。

・土岐哲氏の記述

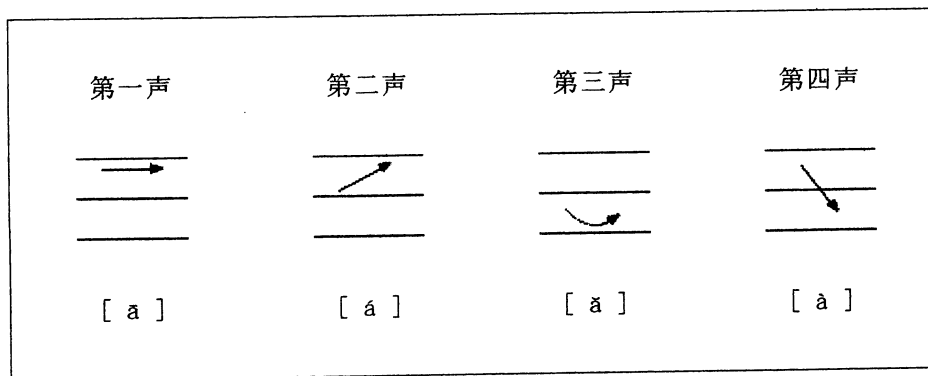
動作を伴ったアクセントの生成指導技術は、これらの文献以外にも紹介されている。例えば、『日本語教育事典』（1982）には、土岐哲氏の記述によって、アクセントの高低感覚を養うための具体的方法として「声の高低に合わせてこぶしを上下させる」方法が紹介されている。ただ、この方法では「声に合わせて」とあるように、こぶしの動きはアクセントを視覚化するための補助手段であるにすぎない。一方、「VT法」の「運動」は、「運動」の繰り返しによって学習者の身体に言語のアクセントのありかたを受容しやすいような環境を作るという意味で、より積極的な役割を担っている。

このように、手など身体を用いたVT法による日本語アクセント指導は、既にいくつか試みられてはいるが、まだ確立した方法は存在していない状態であると言えよう。

2節. 中国語と日本語のアクセントの相違

中国語と日本語は、ともに高低アクセントをもつ言語であるが、多くの文献で指摘されているように、その表れ方は異なる。中国語はアクセントの高さが1音節の中で変化するが、日本語（東京語）のアクセントは、拍（モーラ）を単位とする相対的な高低アクセントである。そのため、アクセントの高さは音節内では変わらず、音節と音節の間、即ち、拍と拍の間で変化する。

以上のような“四声”を図示すると、次のようになる。



日本語（東京語）アクセントは、語や文節について社会的慣習として一定した高低のピッチの配置関係である。同じ高低アクセントの語であっても、中国語などは日本語とはその性格には著しい違いがある。日本語では「アメ」や「ダイク」のように音節と音節が結びついたその音節間の相対的な高さの差が問題になるのに対して、中国語では一つの音節の中での、音の高さの変化（四声）が意味を持つ。

日本語の平らかな高低型のアクセントに対して、中国語は抑揚のある高低アクセントである。日本語は一つの単語の中にアクセント高低のやまが一つしかないが、中国語は2つ以上ありうる。中国人の日本語学習者が持っているこのような母国語のアクセント

セントは日本語のアクセントの習得に影響を与え、干渉する場合が多い。実際中国人学習者が中国語の声調に引かれて日本語を発音することもある。(鈴木 1984)

3節. 中国語母語話者を対象に実施したアンケート調査

中国語母語話者を対象として、筆者がV T法の指導効果を比較検証した結果、従来法とV T法との間に効果はほぼ同じで、2つの指導法間に有意な差は見られなかった(崔 2007)。そこで、筆者は以下のように、川口(1990)にならってV T法の方法により日本語のアクセントの指導を行った。その指導手順を具体的に説明すると以下のようなになる。

図1 - 平板型(政治)アクセントの指導

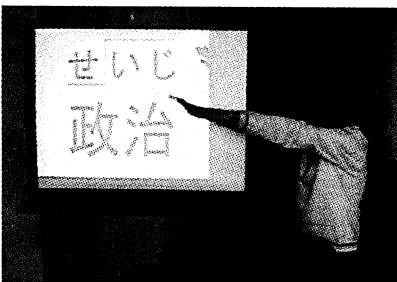


図1は、平板型(政治)アクセントの指導手順であるが、まず、構えた手を上げていきながら[セ]を発音する。次に、手首をゆっくりと起こしながら[イ]を発音し、手を前方へ伸ばしながら続く長音の[ジ]を発音していく。被験者の指導に際し、教師は被験者の「運動」と発音の関連を観察する。体を緊張させないように注意も穏やかにする。

図2 - 頭高型(経済)アクセント指導

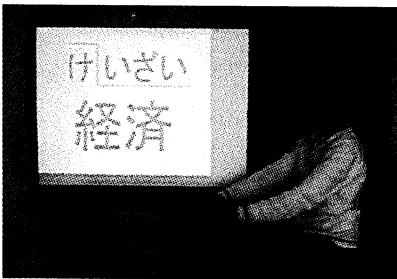


図2は、頭高型(経済)アクセントの指導手順であるが、頭高型の場合は、手を水平にして少し高め的位置から下降させる動作になる。ここでは、手首の力を抜いて指先を下に向け、伸ばし続けていた腕の力を抜きながら手を下に下げていくことで、平たく高い部分の緊張を徐々に除いていくような動きにしたことが工夫した点である。

3-1 調査概要

【調査目的】中国語母語話者を対象に実施したアンケート調査に基づき、V T法に対する学習者の評価を検討する。

【調査期間】約2か月。

【調査対象】学習者は、1年以上～3年未満日本に滞在する者で、中国語母語話者10名。女性：6名，男性：4名。平均年齢は26歳であった。

【レベル】日本語能力中級。

【調査内容】1枚のアンケート紙で、5項目の質問に答えてもらった。質問には「①とてもそう思う②そう思う③そう思わない④まったくそう思わない」の4段階で答

えるようになっている。これは○か×か、どちらかをはっきりさせるために真ん中の選択肢を消し、その程度を調べるために各2段階を設けた。

3-2 調査結果：表1 アンケート調査の回答者数（単位：人）

アンケート調査の結果は、「発音授業に対する評価」と「手の動きに対する評価」の2項目に分けて分析を行った。対象者が10人と数は少ないが、まず、発音授業に対する評価では、80%の学習者が肯定的な評価を行った。例えば、「今回の発音授業は分かりやすかったですか」「今回のような授業があったら、また受けて見たいですか」の質問には80%がプラス評価をした。また「この指導を受けて、日本語の発音を意識するようになった」と答えた学習者は90%もいた。ほぼ同じ学習者がこの2つの質問に肯定的な評価をした。このことから、発音授業に対して肯定的評価をしている学習者ほど学習意欲が高いと言える。一方、発音授業に対する学習意欲はあるが、発音練習に時間をかけられない学習者も若干いた。

質問項目	①とてもそう思う ②そう思う ③そう思わない ④まったくそう思わない			
	①	②	③	④
今回の発音授業は分かりやすかったですか	2	6	2	—
今回のような授業があったら、また受けて見たいですか	2	6	2	—
この指導を受けて、日本語の発音を意識するようになった	2	7	1	—
手の動きによる視覚的な情報があつた方が分かりやすいですか	2	5	3	—
手の動きは分かりやすかったですか	2	6	2	—

次に、VT法の手の動きに対する学習者の評価を分析してみると、全体の半数以上がVT法の手の動きに対しては肯定的評価をしていることが分かった。例えば、「手の動きによる視覚的な情報があつたほうが分かりやすいですか」に対して、70%の学習者が肯定的評価をしていた。このことは、手の動きによる視覚的な情報が学習者の発音学習に肯定的な印象を与えていたことを示す。

一方、「手の動きは分かりやすかったですか」に対する評価では、80%の学習者が肯定的な評価を行った。しかし、その肯定的な評価の中で「とてもそう思う」は20%し

かなかった。その理由として、「VT法の手動きに対する意義が分からない」など、両手による手の動きを嫌がっている傾向も見られた。学習者は、手の動きをしながら発音を学習するので、発音する際に手の動きにエネルギーを消費しすぎると、発音を覚えるのに影響が出てくる可能性がある。従って、教える側は、学習者に発音学習をする際諸動作をまず提示し、体験させ、実際の感想から原因を分析することによって、学習者が好ましいと思う動作を検討する必要があると考えられる。

*** その他、学習者の意見には下のようなものがあった。(質問:「発音練習に関する意見があれば、自由に書いて下さい) 」**

- ①中国の日本語教科書には、アクセント表示のある教科書は少ない。表示法としては、アクセント核を前から数えた①型、②型・・・を語に付す方法(例: けいざい^① 【経済】)があるが、アクセントが意識されにくく、学びにくい。
- ②個人としての指導より、グループ向けの指導の方が良い。学習者が多いと、色々な考え方、違う意見が出てくるので、相手の発音によって自分の発音を互いに刺激し合い、改善することができると思う。
- ③ビデオによる指導よりも、教師が実際に教えた方が面白い。
- ④発音を学習する際に、実際の手の動きによる動作を見ながら学習すると、高低の視覚的な効果により学習しやすい。

4 節、まとめと今後の課題

以上、本稿では、中国語母語話者を対象に実施したアンケート調査に基づき、VT法に対する学習者の評価を検討した。その結果、VT法に対する学習者の評価から、学習者がVT法指導に対してどう感じたかが分かった。その評価は次の2つにまとめられる。1つは、日本語レベルが同じ中級である学習者の中でも、発音の向上意識が強い学習者ほど発音練習を肯定的に捉えている傾向が見えたことである。「この指導を受けて、日本語の発音を意識するようになった」「手の動きによる指導は分かりやすかった」など、発音練習に対して肯定的評価をした学習者の80%が「今回のような授業があったら、また受けて見たい」と答えた。2つ目は、VT法の手動きによる視覚的な効果が学習者の発音にプラスの影響を与える一方、学習者が心理的・物理的に受け入れやすいアクセント練習のための指導を行う必要があることである。

VT法に対する学習者の評価をもとに、VT法に対する指導方法を検討すること、それによって、今後の効果的なアクセント練習のための指導法を開発することが次の課題である。具体的には、学習者にアクセント練習のための諸動作諸動作(「身体リズム運動」(川口 1990)・「首振り法」(川口 1990)・「握りこぶし」(土岐 1982)等)を体験させ、感想を書いてもらう。アンケート調査方式により、学習者の発音習得にプ

ラスになる、一番高感度が高い、好まれる手の動きはどれかを検討することなどである。

注：本稿は、2008年7月「韓国釜山日本語教育世界大会」での口頭発表を加筆修正したものである。

参考文献

- 天沼 寧、大坪一夫、水谷 修 (1978) 『日本語音声学』くろしお出版
- 相原 茂 編著 (2002) 「声調」『中国語学習ハンドブック 改訂版』大修館書店。
- 川口義一 (1984) 「発音と聴解の指導－上級レベルの問題点」『講座日本語教育』第20分冊、pp. 37-47 早稲田大学語学教育研究所
- 川口義一 (1990) 「日本語アクセント指導方法」クロード・ロベルジュ、木村政康編著『日本語の発音指導－VT法の理論と実際－』pp. 115-136 凡人社
- 木村政康 (1996) 「VT法 (ヴェルボトナル法)」鎌田修、川口義一、鈴木睦 編著『日本語教授法ワークショップ』pp. 151-175 凡人社
- 木村政康 (1997) 「V T法を使った発音指導の実際」『月刊日本語 (アルク)』, 10(2), 24-32
- クロード・ロベルジュ、木村政康編著 (1990) 『日本語の発音指導－V T法の理論と実践－』凡人社
- 崔春福 (2007) 『中国語母語話者を対象とした日本語アクセントの指導法の研究』, 広島大学大学院社会科学部研究科・国際社会論専攻 修士論文
- 朱春躍 (1993) 「中国語話者の日本語アクセントの習得－その特徴と指導上の問題点をめぐって－」『第7回大学と科学公開シンポジウム国際化する日本語 - 話し言葉の科学と音声教育』クバプロ, pp. 179-184
- 鈴木義昭 (1984) 「中国語と日本語教育」『日本語教育』55号, pp. 59-69.
- 土岐 哲 (1982) 「アクセント」『日本語教育事典』日本語教育学会編、大修館 pp. 26-43
- 日本放送出版協会 (1998) 『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』
- ペタル・グベリナ論述/北原一敬・内藤史郎編著 (1981) 『話しことばの原理と教育－言調聴覚法の理論－』明治図書
- 望月八十吉、1974 『中国語と日本語』(中国語研究学習双書13) 光生館

アンケート調査の結果

発音授業に対する評価

	質問項目	①	②	③	④	平均
1	今回の発音授業は分かりやすかったですか	2	6	2		3
2	今回のような授業があったらまた受けてみたいですか	2	6	2		3
3	この指導を受けて、日本語の発音を意識するようになった	2	7	1		3.2

注:①とてもそう思う ②そう思う ③そう思わない ④まったくそう思わない

手の動きに対する評価

	質問項目	①	②	③	④	平均
4	手の動きによる視覚的情報があったほうが分かりやすいですか	2	5	3		3
5	手の動きは分かりやすかったですか	2	6	2		3.1

注:①とてもそう思う ②そう思う ③そう思わない ④まったくそう思わない